

幼年唱歌に就て

葛 原 幽

私には、幼年唱歌についてお話をして皆さんの御参考に供する様な意見も経験もないのでありますが、折角のお望ですから、私が、音楽方面の先輩の指導によつて四五年来、幼年唱歌を作つてをりますから、全くの未成品ですけれども、其の試作前後の所感の一端でも申上げませう。本當ならもう四五年後、私の幼年向の唱歌の数がせめて三四百にもなりましたならば、何か、歸納的にも一つの意見を確立し得るでせうと思つてゐます。

私の此の雑話、漫語が面白く無ければ、是は私の罪でなくて、私の話を求めしめられた方々が悪い事にして下さいまし。さうでない、私には此んな不用意なお話を發表する勇氣は無いのです。さて、今日我國に行はれて居る幼年唱歌の大部分は基

督教會若しくは小學校によつて、その曲や歌詞を提供されて居ります。教會の唱歌は我が國民性を顧慮せず、外國の曲に強いて日本語の歌詞を假着させてあるのでありますから教會に於ける特殊の役目に充て用ゐらるゝ以外、一般の國民に唱はるべき唱歌となり得る資格を具備するものとは申されません。

學校の唱歌の方には明治十七年に完成した文部省の「小學唱歌集」が三冊あります。これには日本の音律に適したいゝ曲が澤山集められてありますが、歌詞が六ヶ敷いのであります。いゝには違ひありませんが幼年者に唱はせるものとしては歌詞に難解の憾みがあります。別に餘程研究して發表された「幼稚園唱歌」がありますがこれは亦歌曲が

甚だ少数ですから幼稚園の實際向きでありません。その後といへども文部省検定済で行はれた唱歌は

大抵外國の曲

に日本の歌を

附けたものでありまして、何うも日本の子供がその年齢に相應した思想なり感情なりを、その年齢に相應した表現法を以て唱ふところの唱歌といふものは少いのであります。たゞ田村氏編輯の者にいゝのがあつたと思ひますが今日から見れば飛行機とか活動寫真とかいふやうなものが題材として取入れてありませんので、しつくり時代に合つて居るものとは申されないかと考へます。

「戦友」(こゝは御國を何百里)やカチューシャの小唄があれほど盛んに唱はれたといふことは大いに考へてみるべき問題であります。「四百餘州」や「雪の進軍」も、永井前樂長のお作と承つて居ますが随分唱はれたものでした。「戦友」は軍人向きで

ない、即ち志氣を沮喪せしむる虞れがあるといふので軍隊では近頃禁せられて居ると聞きました。カチューシャも盛んに唱はれましたが識者からは卑俗であるとして擧げられて居ります。そこへ行くと流石は「四百餘州」や「雪の進軍」は上品であります。

扱て以上の流行した唱歌を考へてみますに、

日本人は複音

をあまり考へ

てゐないやうであります。即ちハーモニーを解してゐないやうであります。日本人を喜ばして居るのはメロディだけであるやうであります。一面から見れば唱歌に對する日本人の教養が未だその域に達して居ないからであるとも見らるゝのであります。コーラスに泣き得るのには聴者の耳が十分に準備せられて居なければならぬのであります。それと同じく、ある考へ方からいつて見ますと日本人には何うも長く引いて唱ふものゝ方が喜

ばれるやうであります。「雪の進軍」にしても、「戦友」にしても、カチューシャにしても皆長く引いて唱ふやうに出来て居ります。然るに教會の讚美歌や小學唱歌には軽い調子のもが多く、一般に靜かに唱ふやうに出来て居ります。乃で子供は學校の教室では唱つても校外へ出るともう唱はないのであります。

以上申し上げたことを簡単に約めてみますと

今日の日本の

子供が喜んで

自から唱ふことの出来る唱歌——それが非教育的であつてはならぬのは申すまでもありません——は實に尠い、否殆んど無いと言つてもよい位なのであります。

それなら早速作つたらばよからうと仰有る方があるかも知れませんがこれが又却々さう容易く行はれない仕事なのであります。容易く行ひ得るならば、文部省が音楽取調掛を設置したのは明治十

二年でありますから、もう今年までには随分長い年月も経つて居り、相當な作曲者や作歌者が時代々々に出て居なければならぬ筈であります。ところがそれがさう行つてゐないのには理由があるのでありませう。

それは我國の作曲者といへば大抵音楽學校出身の人で、その多くは外國の曲にばかり親しんで來て居る人々でありますから、その人の天分や頭の向け方に依らなければ斯ういふ唱歌は出来ないものであります。併し困難であるとはばかりで指を染める人がなければ何時まで経つても出来るわけはないのでありますから誰か、始めなければなりません。尤も今までにこの方面に着手してかなりな成功を收め得た人がないではありません。中でも

吉丸一昌氏の

幼年唱歌集の

如きには、ずい分優れていゝのがあります。幼年唱歌集は後に新作唱歌集と改名されましたが子供

向きの唱歌が澤山集めてありました。尤も中頃からチヨイ／＼外國の曲に歌を附けたものなどをも發表なさいましたが大體に於て日本の國民性を土臺に置いた歌なり曲なりでありました。しかし惜しいことに氏は早世せられて了ひました。それ以來氏の遺志を繼ぐ者は未だ現れて來ないのであります。私も吉丸氏には種々伺つて教へて戴きたいと思つてゐたのでありますが、その暇無き内に氏は早くもこの世を去られて了つたのであります。

吉丸氏の唱歌は音楽界にも評判になりました氏の作には上品な軽い滑稽が多くありました。一體子供は滑稽に富むものであるらしく、私共の四才になる女の子なども自分で蓄音機のレコードを選び出し、滑稽な顔付をして踊つたりなぞしますが吉丸氏ので發表せられなかつたのに對話唱歌といふのがあります。その中の「太鼓」なども極く、軽い滑稽を唱つたもので子供が太鼓を欲しいと言ひ

ますと父親が『太鼓を叩くと矢筈しくつて眠れない』と言ふ。すると子供が『それではお父さんが眠つて了つてから叩くから買つて下さい。』といふのであります。

この「對話唱歌」は盡力する人があつて遠からず世に現はれる事と思ひます。歌詞は吉丸氏から數人の作曲家の手へ移つて作曲中であつたのでありますから。さて、それにしても、いつも、

やさしい様で

六かしいのは

兒童向の仕事が大人のする事です。私は以前から随分子供向きの唱歌を作つて見ました。既に新唱歌集十二冊を發表して置きました。私はこの唱歌集の表紙の裏へも、今申上げたやうなことを簡單に書いて置きました。それを一寸讀んで見ませう。

日本のコードモの先生方や、父兄母姉の方々へ

日本のコードモにうたはせたい歌、日本のコードモの氣分にしつくりあふメロデー、それを試みたくて豫て親しい樂友諸君に

謀り、二三年來「小學生」「幼年世界」「少年世界」などで發表したものを、集めて見ました。皆、コドモの爲に作つた歌、その歌の爲に特に出來た曲です。

どれも、これも、皆、日本の歌であり又、日本の曲であります。四五十年來、日本にある多くの歌曲は、殆んど古來の外國人の曲に日本語の歌をつけて見たものであります。私も多年その方の歌も試みてありますが、この集では、昔から有る外國人の曲に、後から日本の歌をつける事は、絶対にせぬ積です。あくまで日本の歌、日本の曲として、いさゝかでも次の時代の國民の中から眞の「日本の音楽」を産み出す爲の棄石ともなるならば、何んかに悦ばしい事でせう。

どうぞ、充分に御批評を願ひます。

新唱歌集以後私は樂友小松耕輔、梁田貞の二君と相謀つて「大正幼年唱歌」といふ幼年唱歌集を發表しつゝあります。一體極論すれば、

私の歌の作曲

者は私をよく

理解して居る人でなければなりません。私の歌は私を理解して居る作曲者によつて始めて十分に唱ひ得るやうに作曲される筈であります。それ故私は私をよく理解して居る二人の樂友と相結んだの

であります。

「大正幼年唱歌」は最初、春夏秋冬に對してそれ／＼一冊宛都合四冊作る豫定でありましたが四冊だけではとても十分に幼年者の世界を唱ふことの出來ないことに氣が附きましたので、十冊作らうといふことになりました。一冊には十づゝ歌が集めてありますから全體では百になるわけであります。尤もこの唱歌集の出版を受負つてくれる目黒書店でもかなり義侠的に盡してくれまして、澤山お作りなさい、さうしたら多くの中からは後に残るやうなもの出來ませうと言つてくれますので私達もそのつもりで始めました。今第五集まで出來て居ります。

この幼年唱歌は私達三人の協同事業であります

三人とも非常

な熱心と興味

とを以て従事して居るのであります。歌は皆私が

作るのでありますが句の長さ、用語の選擇に人知れぬ苦勞をして居ります。出來上ると三人集つて相談するのであります。これに着手したのは去年

の三月からであります。爾後毎週月曜日の夜に一逼つゝ必ず集合することに決めてあります。初めはこの集ることがかなり億劫でイヤでありましたが今では反つて樂しみになりました。その内に自分達同志でばかり試みて居ても仕方がない。誰かこの方面の人にも聞いて戴いて悪いところを直したいと思ひ、丁度去年の六月十二日でした、フレール會の例會がお茶の水の女子高等師範學校の講堂で開かれた日に私達が伺ひまして、吉田熊次先生の御講演が濟んだ後、演奏して會員の方々に

幼年唱歌の歌

と曲とに就て

御批評を願ひました。而して私達はこの時會員の方々から種々参考になるお言葉を頂戴したことを今だに嬉しく思つて居ります。

「大正幼年唱歌」第一集に「蝶と春風」といふのがあります。

一、ヒラヒラ舞ふよ、蝶々が舞ふよ。

蝶々が舞へば、菜の花うごく。

うごくな、花よ。

とまれよ、蝶々。靜かに止まれ。

お花に止まれ。

二、ソヨソヨ吹くよ、春風吹くよ。

春風吹けば、菜の花うごく。

春風吹くな、

お花を吹くな。蝶々の翅も

吹くなよ風よ。

右の歌の中に「菜の花うごく」といふ句がありますが、私は最初「菜の花ゆらぐ」としたのであります。ゆらぐの方がうごくより唱ひよくもあり、菜の花のゆらくする様が目に見えるやうですから、實際に子供がゆらぐといふ言葉を使はないことを知つてゐながらも、知らなければ覺えさせる爲めとしてもいゝではないかといふやうな了簡でゆらくとして置いたのであります。しかしこの時皆さんがうごくの方がいゝと仰有いましたので自

己固執の愚を避けて、皆さんのお説に従ひ、「菜の花うごく」と訂正したのであります。

それから第二集に「かへる」といふのがありません。

かへる

一、一つ飛んでは両手をついて、

何か考へ考へながら、

蛙、何處まで歸つて行くか。

蛙、歸つて何して遊ぶ。

二、池へ歸つて遊いで遊ぶ、

池は私の生れたところ、

池の友達、游が上手、

池へ歸つて皆と遊ぶ。

これも最初第二番の歌は蛙が考へながら歸つて行くけれども自分のお池が見附らないといふやうな意味の歌でしたが、ある保母の方から

「何といふ情け

ない蛙でせう、

开廢なさない歌を子供に唱はせたくありません」と申されましたので、成程と思ひ、第二番の

歌は全部、歌の意味を作り替へて今のやうなものとしたのであります。

それから同じ第二集に「シャボン玉」といふのがありません。

シャボン玉

一、ふくれるくシャボン玉、

フワく吹けばクルくと、

まはつて膨れる管の先、

あんまり膨れて破れるな。

二、あがるよくシャボン玉、

フワく揺れてキラくと、

ひかつて上るよ、空高く。

あんまり上つて、破れるな。

これは取材の方面から見ても子供がシャボン水を吸ひ込むと呼吸器を痛める憂ひがあるし、衣物に汚點を拵へたりしていけませんからさういふ歌は唱はせたくありませんと或る奥様が仰いました私は「シャボン水を吸ひ込むといふ方面から見ればいけません、實際に於て子供がシャボン水を吸ひ込むやうな場合が多くあるのでありませうか。

ありませんから何れが正しいとも申されません。乃で成る丈け多く用ゐられて居るアクセントに據る他はないのでありますが各人が自分のアクセントを根據として居りますので、何のアクセントが廣く用ゐらるゝかをさへ知るのも容易なことではありません。

私は又擬聲オノマトペを唱歌の中に取り入れることを心掛けて居ります。今までも「ひよこ」や「お馬」等の内には擬聲が用ゐてありますが將來も擬聲を巧みに利用したいと思つて居ります。しかし佛の顔も三度とか、さう澤山は用ゐません。

ひよこ

一、ひよこ、ひよこ、ビヨビヨないて、

親のまはりで、よろこびながら、

餌を拾ふ、餌を拾ふ。

二、ひよこ、ひよこ、ひよこが一羽、

垣根の外で、迷ひ子になつて、

ビヨビヨ、ビヨビヨ。

お馬

お馬ロンロン

バカバカ跳べよ。

山でも坂でも一とびに。

とびこえ、とびこえ、

勢こめて、

進めよ、進めよ、日本のお馬。

去年の全國幼稚園關係者大會の時「幼稚園では

三大節に唱ふ

やさしい歌が

なくつて困る」といふお話がありましたので、特に早く「天長節」一月一日「紀元節」の三つを作りました。ずる分苦作ですが――。

天長節

一、今日は芽出度い天長節よ。

何うしてお祝ひいたしませうか。

皆で大きなお聲をそろへ、

萬歳となへてお祝ひしませう。

天皇陛下萬々歳。

二、今日の芽出度い天長節に、

皆で、しつかり約束しませう。

今に大きな大人になつて、

忠義を盡す約束しませう。

天皇陛下萬々歳。

序でに茲で讀者諸君にお願ひして置いて戴きたいのは何ういふ歌を作つてくれと註文して戴きたいことでもあります。これは是非お氣が附かれ次第私のところまで御希望なり、御要求なりをお申越し下さることを願つて置きます。(これは記者からも皆さんにお願ひして置きます。葛原氏の御住所は東京市外大久保百人町二三九です)それから倉橋先生からも謂はれた事で

私は私の歌にソフトネスとかなだらかさとかいふやうなものを缺いては居ないかと心配して居ります。理窟に流れ易いのを恐れて居ります。種々苦心して仲間内であつてもない斯うでもないと言ふんざ直して發表するので、つまり私としては最善を盡して居るので、今申したやうな缺點があるとしたならば、これは、自分の天分の薄い結果でありまして深く哀しむ外はないのであります。

最近に私が一番苦心したのはお伽話の唱歌であります。これは大抵先輩のお作が一つや二つは必

ずあるのであります。乃で私は今までのやうに物語體に作るのを避けて、ある場面を取つてこれをドラマチカリーに作つたのであります。題の附け方も「桃太郎」と言ひますと子供が「桃から生れた桃太郎」の方を唱ひ出しますので、わざと「鬼が島」といふやうに附けて居ります。子供は一體物をバーンニファイして喜ぶものであります。それ故、一方先輩のと趣向を違へるためといふ理由もあるのであります。

お伽話はすべ て演劇的に唱

ふことにいたしました。今出来て居るのには「鬼が島」と「木舟土舟」とがあります。

木舟土舟

兎の舟は木の舟で
前の方へと勇んで進む。

狸の舟は泥舟で

とろり／＼と見る／＼とける。

すると兎は突つ立ち上り

持った權をば打ち振り上げて

『思ひ知つたか、狸どの。』

そこで狸は權をばすて、

をろく聲に手を合せ

『命ばかりは、兎さま。』

この「木舟土舟は」礫川小學校に居る私の友人が振りをつけて生徒に唱ひ且つ演せしめて居るさうであります。東洋幼稚園の岸邊先生も私達の唱歌に振りをつけてたさうであります。

「お船」はナシヨナル卷一にある「ジャツクの船」から思ひ附いたのでありますが、これも日本をニホンとすべきかニツボンとすべきかに就て餘程迷つた末、兎も角唱ひいゝやうにニホンとして置きました。

お船

お池に浮べた帆かけ船、

帆は眞白で、帆はしらに、

日本の旗が、ホイラヒラ。

日本の旗は、日の丸よ。

水にうつつて、

キイラキラ。

話がいろいろに飛びますが第一集の「さくら」の内に「野山のこらす花の雲」といふ句があります。

これは「野山一面花の雲」としたかつたのでありますが、先輩のにさうありますのでそれを避けて「野山のこらす花の雲」としたのであります。

私は唱歌を作るのにたゞ

面白さの外に

サムシングを

欲して居るのであります。しかしその點で何うもソフトネスを缺くやうであります。自然界は一般に作歌し易くあります。私は自然界を唱つた歌に於ては努めて理科の智識、六ヶ敷く言へば科學的智識を不知不識の間に鼓吹したいと思つて居ます一番作り難いのは「ストオヴ」とか「お辨當」とか言ふやうな器具類を歌ふことであります。尙材料に關して言ひますならば將來は滑稽趣味を入れたと思つて居ります。「お月様」や「お星様」の歌があつて「お日様」の歌がないと大阪の方から御注意

持った權をば打ち振り上げて

『思ひ知つたか、狸どの。』

そこで狸は權をばすて、
なるく聲に手を合せ

『命ばかりは、兎さま。』

この「木舟土舟は」礪川小學校に居る私の友人が
振りを付けて生徒に唱ひ且つ演せしめて居るさう
であります。東洋幼稚園の岸邊先生も私達の唱歌
に振りを付けられたさうであります。

「お船」はナシヨナル卷一にある「ジャックの船」
から思ひ附いたのでありますが、これも日本をニ
ホンとすべきかニツボンとすべきかに就て餘程迷
つた末、兎も角唱ひいゝやうにニホンとして置き
ました。

お船

お池に浮べた帆かけ船、

帆は眞白で、帆ばしらに、

日本の旗が、ロイラヒラ。

日本の旗は、日の丸よ。

水にうつつて、

キイラキラ。

話がいろいろに飛びますが第一集の「さくら」の

内に「野山のこらす花の雲」といふ句があります。

これは「野山一面花の雲」としたかつたのであり
ますが、先輩のにさうありますのでそれを避けて
「野山のこらす花の雲」としたのであります。

私は唱歌を作るのにたい

面白さの外に

サムシングを

欲して居るのであります。しかしその點で何うも
ソフトネスを缺くやうであります。自然界は一般
に作歌し易くあります。私は自然界を唱つた歌に
於ては努めて理科の智識、六ヶ敷く言へば科學的
智識を不知不識の間に鼓吹したいと思つて居ます
一番作り難いのは「ストオヴ」とか「お辨當」とか
言ふやうな器具類を歌ふことであります。尙材料
に關して言ひますならば將來は滑稽趣味を入れた
いと思つて居ります。「お月様」や「お星様」の歌が
あつて「お日様」の歌がないと大阪の方から御注意

ありましたから「お日様」の歌も作るつもりです。「汽車」や「電車」は作りましたが「自動車」はまだ作りませんのでこれも一つ作つてみたいと思つて居ります。その他、「お客様」といふやうな題の歌も作つてみたいと思ひます。これは實は既に一度拵へたのでありますが作曲家の方から

這麼歌に曲は

附けられない

と刎ねつけられて了つたのであります。當人少々悲觀の體でありますが目下改作中であります。

大正幼年唱歌が第十集まで出来上りましたらば今度は先生が子供に唱つて聞かせる歌を作つてみようと思ひます。これは當然作らるべくして今まで作られなかつたのであります。倉橋先生もこの必要を認めていらつしやいます。それですから私達は是非これを作らうと思つて居ります。それから外國の子供の曲にいゝのが澤山ありますからその中から日本の子供に適するものを選んで一冊作

りたいと思つて居ります。これは兩者とも各十曲づゝ集める豫定であります。それ故全部十二冊、百二十曲で私達の此の事業は一先づ段落をつけておく積であります。

それから最後に私から皆さんにお願ひして置きますのは前にも申し上げましたやうに題目の御注文をお申越し下さることゝ、もう一つ「大正幼年唱歌」をお唱ひ下さつて種々お直し下されたいこととあります。これは全國の有志の方々にやつて戴くと非常に參考になるであらうと思ひます。

それからもう一つ、これは全然自分達の唱歌を離れての希望ではありますが、

皆さんが各地

方向きの唱歌

を作つて子供に唱はせて戴きたいといふことであります。これは相當の經驗を積まれた方々は是非試みられんことを切望して歇まないものであります而してお互ひに眞面目に批評し合ひ、日本の子供の爲めに益々いゝ唱歌を澤山提供したいものでもあります。(文責在記者)